【全日制】R80108 第３学期始業式・校長講話

皆さん、おはようございます。そして、新年あけましておめでとうございます。
令和８年（2026 年）を迎えました。年明けに構内を歩いていると、寒いなかでも自習室で勉強している生徒や部活動に取り組んでいる生徒たちの姿を見かけました。こうした生徒諸君の姿を見て心から応援したくなりますとともに、指導に当たってくださった先生方に感謝いたします。

さて、今日は昨年１２月に発行されました、図書館報１８号に掲載した内容からお話しします。記事を寄せてくださった方々をはじめ、作成に当たってくださった皆様に感謝いたします。
既に読んでくださった方には重複する部分がありますが、ご容赦ください。
（タイトルは、「知性を磨け！　～読書のすすめ～」でした。）

私が気に入っている寓話に「がんばる木こり」という作品があります。内容を紹介しますと、

昔々、１人の木こりが材木屋に仕事をもらいにいった。申し分のない条件だったので、木こりは仕事を引き受けることにした。
最初の日、木こりは親方から斧を一本手渡され、森の一角を割り当てられた。男はやる気満々で森に入った。その日は一日で１８本の木を切り倒した。
「よくやった！この調子で頼むぞ！」親方の言葉に励まされた男は、明日はもっと頑張ろうと誓って早めに床に入った。

次の日、男は誰よりも早く起き、森に向かった。ところが、その日は努力もむなしく、１５本が精一杯だった。「疲れているに違いない。」そう考えた木こりは日暮れとともに寝床に入った。
夜明けとともに目を覚ました男は「今日は何としても１８本の記録を超えるぞ」と自分をふるいたたせて床を出た。ところが、その日は１８本どころかその半分も切り倒せなかった。次の日は７本、そのまた次の日は５本、そして、最後には夕方になっても２本目の木と格闘していた。

何と言われるだろう、と　びくびくしながらも、木こりは親方に正直に報告した。「これでも力の限りやっているのです。」親方は彼にこう尋ねた。「最後に斧を研いだのはいつだ？」
男は答えた。「斧を研ぐ？研いでいる時間はありませんでした。何せ木を切るのに精一杯でしたから。」（戸田智弘・『座右の寓話』・ディスカヴァー・トゥエンティワン・2022 年）

この木こりのように何事にも懸命に取り組むことは尊い。しかし、研がない斧でいくら頑張ってもなかなか木を切り倒せないでしょう。
これを学びにたとえてみると、がむしゃらに暗記して試験に臨み、良い点を取る。うまくいけば入学試験までは通用するかもしれません。しかし、知性が伴わなければ、こうした方法も近々限界を迎えるのではないでしょうか。ですから、木こりが斧を研ぐように、皆さんには知性を磨いていただきたいと思います。

私は知性を磨く１つの方法として、読書を取り上げました。では、なぜ読書なのか？それは、自分で調べ、自分で考える力、すなわち「自調自考」の姿勢につながるからです。

この「自調自考」について、２名の生徒の姿が印象に残っています。
１名は、３年生ラグビー部の生徒です。彼は総合型選抜で希望の大学に合格したようですが、昨年１２月に彼の発表を聞く機会があり、その「自調自考」の姿勢が大変素晴らしいと感じました。素晴らしいのは、結果ではなくプロセスです。幸い、その姿勢を大学から高く評価していただき、本当によかったと思う一方で、そこまで取り組まなければ、倍率の高い大学の総合型選抜には通用しないのではないかとも感じました。
もう１名は、２年生の野球部の生徒です。彼は、昨年１２月に行われた埼玉県教育委員会主催の「探究活動生徒発表会」で、「本気でウエイトトレーニングに取り組めば打球の飛距離がアップする説」について、多くの参加者の前で探究の成果を披露してくれました。県内の多くの学校が探究学習の成果を競う場ですが、彼の発表内容や姿勢は大変素晴らしいものでした。しかし、私が評価したいのは、結果だけではなく、むしろ発表までのプロセスにおける「自調自考」の姿勢です。

本日は「自調自考」の姿勢について、たまたま、私が見かけた２名の生徒を取り上げ、お話をしました。
朝高生には、高い潜在能力、すなわち「伸びしろ」を備えた生徒が、たくさんいると思います。（いい先生もたくさんいます）
後は、皆さんがチャレンジして、チャンスを生かすか否かです。今年は、自らの実力を大いに伸ばす１年にしていただきたいと思います。

以上で終わります。